

なかやま探訪

中山町郷土研究会報

令和五年一月号 No.八九

円同寺所蔵中山光直書状を読む

―最上義光関連の 一級史料―

現在中山町の文化財（書跡）に指定されているこの史料は、長崎楯九代中山玄蕃頭光直（朝正）が最上義光の家宰氏家尾張守守棟にあてた年賀状で県内に唯一残る中山光直の書状として大変貴重なものである。（昭和四十三年四月二十四日 中山町文化財指定）



図601-①・
長崎楯9代城主
中山光直の最上
氏重臣氏家尾張
守に宛た年始状。
約400年前の天
正12年(1584)以
後の書状。本紙
横1尺3寸8分
(約42cm)縦6
寸(18.2cm)(長
崎円同寺所蔵)

書跡

青陽之御嘉祥珍重、
更以不可有御際限、候
依之末廣一本令進獻之候
敢表西王母之術、候猶御
吉事期長日、令省略之、由
可得御意、候恐謹言
スズ 阪七日 玄番正光直（花押）
謹上氏家尾張守殿 人々御中



中山玄蕃頭光直
(朝正)の木型(花押)

一部の研究者ではあるが（中山）玄番（蕃）正光直の署名につ
いて「正」の字は誤りでありこの書状は偽物ではないかという方
がおられるがこれは誤りである。

正は（かみ）と読み律令制の四等官（長官（かみ）・次官（す
け）・判官（じょう）・主典（さかん）で最上の官・役所によつて
文字を異にする。太政官では「大臣」、神祇官では「伯」、省では
「卿」、弾正台では「伊」、坊・職では「大夫」、寮では「頭」、司
では「正」、近衛府では「大将」、兵衛府・衛門府などでは「督」、
国では「守」（八二六年以降、上総・常陸・上野では介（すけ）を
守、長官を太守と称する。）

今回の書状は正月七日付けの年賀状で意識すると『春光麗かな
このごろ、よいことがありましてまことにめでたいことござい
ます。さらにかぎりないしあわせを信じております。このため末
広一本をさしあげた次第です。とくに不老不死の西王母が用いた
術を表したつもりですが今後ともよいことが長く続きますよう期
待申しあげ、くどくど申しませんが、おわかりいただきましたたく存じ
ます。』と書かれている。※引用 中山町史 上巻 平成三年十一月一日 発行
光直本人が正月の年賀状としてあえて、「正」の文字を使用した
と思われる。

故柏倉亮吉山形大学名誉教授は生前、教え子の一人である当会
会員に「この書状は本物である。書式からみて同格の者への書状
と判断され、天正年間後半（天正十二年〜二十年）に書かれた中
山玄蕃光直の最上義光にも関わる大変貴重な史料であると語られ
ていた。

この書状について花押も含めて最上義光の研究者の先生方に再
検討をお願いしたい。

（文責 本会編集部）

なかやま探訪

中山町郷土研究会報

令和五年三月号 No. 九〇

谷木沢から柳沢に変わったのは何故か

将軍が暮らす柳宮が語源らしい



2012 保角里志 高志書院
谷木沢楯跡の概要図 南出羽の戦国を読む

コンピュータ万能の時代になったが我町の歴史に関しては不明のことが沢山ある。

中山町の区域に政府の事業が現れたのは柳沢を中心とする口分田、いわゆる条里制で奈良時代の末である。

少したって八木郷という集落名が現われるが今の柳沢周辺にあつたらしい。

鎌倉時代に入って、寒河江大江氏に従って伏熊（大江町三郷）に居住した中山氏が勢力を得て山を越えて室町初期に八木沢村に八木城を築き、えんどう寺を開山したという伝承があり、『中山町史』も述べている。

この中山氏と長崎城初代の中山継信の関係も不明である。『中山氏の歴史』を上梓した国井葭村氏は「前期八木沢の時代が存在したのは史実と思われるが史料が無く断言出来ない」と述べている。

寛正五年（一四六四）、長崎中山氏四代の玄蕃頭朝勝が谷木沢に山楯（谷木沢城）を築き居住した。その頃から中山氏の統治は谷木沢が中心だったらしい。柳沼寺、柳沢寺が開山され、「柳」が使われている。

平成十五年頃、山形市との合併協議があり、柳沢の著名な元大教授が花柳界を連想させる「柳」は好感を持ってないから昔の「谷木」か「八木」に戻す好機ではないかと町長に意見を出した。

教育委員会の学芸員に地名と「柳」の関係を聞いたら、「中国の故事に因んで「柳宮」という言葉が将軍の居所を示す」と判った。

日本でも幕府は柳宮といい、徳川幕府には「柳宮秘鑑」「柳宮婦女伝叢」の文書があったという。

柳沢の人達は殿様が村で一緒に住むのを喜んで谷木沢を柳沢に変えた事が理解される。

中山氏が主城を長崎に移したのは、系図の後書きの「楯主の交替」によると、長崎城押領の渋谷氏の死後「其の後玄蕃頭朝政谷木沢から長崎に移り長崎式部と号し其子朝正玄蕃頭と号し」とあり、城主の譲位をしめしたが年月の記述がない。おそらく天正の少し前頃と思われる。

『中山町史』では柳沢寺の開山時には谷木沢城は廃城になったとするが、城館史研究が進んで天正期の最上領の名城の一つに入ると評価されている。

北の関ヶ原合戦とも言われた慶長五年の出羽合戦の時まで谷木沢城は存続したらしく、岡の三嶋山楯、平塩の山崎楯の「横堀」「竪堀」等、慶長期の築城手法がそれを示している。

ふるさと中山町の史跡(第十二回) 岡村観音堂と秘仏千手観音菩薩

中山町郷土研究会 安彦 政信

最上三十三観音第14番札所「岡村観音堂」は中山町岡地区の中心地に位置し本尊「十一面千手観音菩薩立像」は秘仏とされています。

昨年令和4年はコロナ禍により2年間延期となっていた「最上三十三観音子歳連合ご開帳」が5月1日から10月31日まで行われ、県内外から多くの参拝者が訪れました。

(写真①)

観音堂の前には「最上三十三観音」ののぼり旗とともに今年限定の「南無観世音菩薩」の奉納のぼり旗が立っていました。その中には、なかやま観光大使の落語家春風亭昇りんさんの名前もありました。(写真②)

私も参拝をして特別印のある御朱印と御詠歌も書かれています記念御影(おすがた)、御開帳記念の散華(さんげ)をいただきました(写真③、15③13)。令和5年も参拝は可能で観音堂東側の石川宅・須貝宅で御朱印の受付が可能です。

岡村観音堂(中山町指定文化財)の由緒
堂内に伝わる畧縁起(扁

額)によれば、奈良時代の高僧行基がこの地を訪れ千手観音・不動明王・毘沙門天の三体を彫刻し、二十丁余(約二キロ)の裏山の霊地「鏡が町」にお堂を建て尊像三体を安置し奉ったことが堂宇(どうう)の起源とされています。その後、現在の地に移転し、現在のお堂は享保5年(1720年)に再建されました。

古来より雨乞い観音・諸願成就の霊験あらたかな観音様として信仰を集めています。

現在、長崎地区にある正法寺は、かつて岡地区にあり、名を長慶寺(ちやうけいじ)と称していました。この長慶寺の境内にあったお堂が観音堂です。

別当の金剛山正法寺は嘉応年間(1169年〜1171年)に長崎に移り遠ざかりましたが、堂内には本尊をはじめ多くの仏像、絵馬、石碑、仁王門、そして門前にはお大きな鐘楼堂が残っています。

7月30日、「岡村観音堂」の本尊御開帳を記念して元東北芸術工科大学芸術学部教授

長坂一郎氏を講師に迎えて「本尊木造千手観音菩薩立像と観音堂の仏像群」と題する講演会が開催されました。(写真④)

長坂教授は令和元年度に実施した仏像調査で判明した新たな見解などを紹介しました。本尊である十一面千手観音菩薩立像は、構造や形態的な特徴と木材の放射性炭素年代測定の結果から「鎌倉時代初期に平安中期から後期の様式で造像されたもの」と解説しました。

さらに、両脇の毘沙門天立像・不動明王立像と合せて、天台宗の総本山である比叡山延暦寺の天台三尊形式に則り制作された可能性を示唆しました。また、実は頭が十八面あり、この点については全国でも稀な事例だということでした。(写真⑤)

岡村観音堂には他にも多くの仏像や絵馬など貴重な文化財が残っています。これらの諸文化遺産を保存継承するために皆様の御支援・御協力をお願いいたします。

写真・資料等提供者

中山町・中山町教育委員会
会・中山町歴史民俗資料館・金剛山正法寺・岡村観音納経所石川恵美、須貝田鶴子



① 最上三十三観音子歳連合ご開帳



② 岡村観音堂 (2022)



④ 御開帳記念講演会



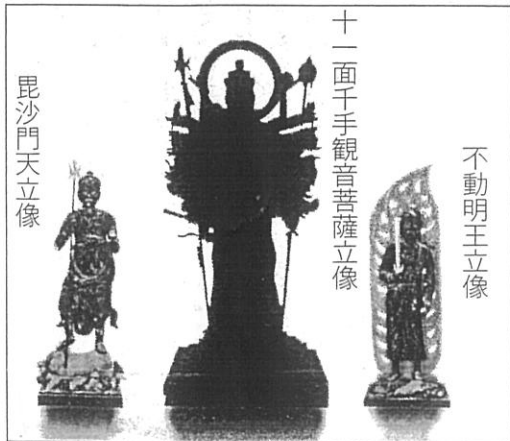
③-1 御朱印



③-2 散華



③-3 記念御影



⑤ 中山町指定文化財

中山氏と最上氏の関わりについて

横尾尚寿

中山氏は、寒河江大江氏の被官であつたが次第に自立した国人になつた。

左沢氏、白岩氏、溝延氏なども同族関係から次第に地縁主義化していく。

天正二年（1572）、最上氏親子の争いでは中山氏は義守方であつた（伊達氏記録）。

『長崎村古城主中山玄蕃頭系図』および『楯主の交替』は貴重な史料であるが、諸処に粉飾が見られる。

天正十二年（1582）六月、最上義光が大江高基を攻撃した時、中山光直（朝正）は父の朝政の一周忌も済まないで最上氏に降参したとなっている。この場合、寒河江攻撃の先鋒を命じられるがそれが無い。

『山形県史』第一巻は昭和五十七年の発行だが、そこには某年五月十三日、中山光広（光直の誤記か）が最上氏の天童攻撃に関して天童氏縁故の国分氏が助勢するのを牽制した文書である。最上氏の天童攻略は、天正十二年十月だから五月の文書は『楯主の交替』は偽書であることの証明になる。

もう一件、寒河江市平塩、杉沼家内内の「日野平三の墓碑」に天正十二年甲申五月十四日がある。平塩の伝承では「山崎楯主の大学頭に、本家の長崎が最上方になって活躍している、本家に做すべき」と意見したが大学頭は聞き入れず、日野平三は切腹した。

『中山町史』が『山形県史』等に做わなかつた理由は不明である。

天正時代、出羽国内で最上氏と競つた大名は横手盆地の小野寺氏、庄内の大宝寺氏である。大宝寺氏の触手は、左沢氏、白岩氏、山辺氏から寒河江大江氏にまで広がっていた。

山辺氏あて七森氏書状が判明したのは平成十年以降である。そこには「大宝寺義氏が銚延を平らげたからいづれ寒河江筋に助勢に行く、」とあり保角里志氏は天正九年か十年の書状とみている。そして最上義光の山辺攻略がなされ白鳥氏、大江氏、天童氏が天正十二年に最上領となり中山氏は最上氏の重臣となつたのである。

『天童合戦の前後』（大木彬著平成二四）には最上方の武將に長崎式部と岡七内があるが式部は中山家十代の主膳（光信）らしいが「岡七内」は判らない。

慶長五年、関ヶ原決戦と同じ頃、上杉家家老直江軍が最上領に侵攻したが最上方の戦略のため戦課なく、直江軍は撤収した。戦功によって最上義光は五七万石の大々名となり、中山光直は華々しく活躍するが元和八年、最上家は領内不和を以て改易となる。

二代將軍秀忠侯の温情で、武功の重臣三十人は諸国の大名に召し抱えと成り、中山主膳は小田原の阿部備後守に仕える。阿部家は後、岩槻、宮津、宇都宮、福山と移封、天保頃は筆頭老中として活躍している。